

興行分析 12月度レポート

◆————◆
< 2012年1月18日 >

首都圏ロードショー館の年間興行成績は
興収が前年比84.1%、動員が83.7%に

KRI 

キネマ旬報映画総合研究所

興行分析 12月度レポート

【首都圏ロードショー館の前年同月比は、動員92.8%、興収97.0%】

12月の興行は、東京ロードショー劇場80館の集計では、総動員数が77万9825人、総興収が10億9075万円で、前年同月(81館)比では動員数92.8%、興収97.0%となった。2011年は、興収で前年比を超えた月が6月と11月の2回、動員では11月のみとなり、年間集計では、興収が前年比84.1%、動員が83.7%と大変厳しい結果に終わった。要因としては、2010年の3D特需が早くもその効果を失ったこと、そして震災の直接的・間接的な影響に加え、国内外の経済環境の先行き不透明感などが、映画館への客足を鈍らせた。興収100億円を超える作品は生まれず、これは2000年以降で3回目となる。過去2回は2000年と2009年で、2000年は年間興収が1708億円に止まり、一方、2009年は30億円以上の作品が18本あったことで全体が押し上げられ2060億円と、2001年以降の約2000億円基調を維持している(2011年の30億円以上は13本)。

【「映画 けいおん！」が137スクリーンで驚異的なヒット】

12月は、初週にスピルバーグ監督最新作「タンタンの冒険／ユニコーン号の秘密」(東宝東和)、テレビシリーズで人気を博した「映画 けいおん！」などの話題作が登場。「タンタン〜」は12月1日(木)に公開され、日曜日までの4日間集計で動員22万6404人、興収3億1929万円となった。895スクリーンの超拡大公開の割に動員が伸び悩んだのは、“タンタン”というキャラクターが日本で浸透していないことに加え、興行的な成功事例の少ないモーション・キャプチャー・アニメだったことも理由に挙げられる。公開規模を最大化したため、1スクリーン当たりの興収は4日間で35.7万円(1日平均8.9万円)となり、劇場サイドの厳しさが窺い知れる。

一方、3日(土)公開の「映画 けいおん！」(松竹)は、137スクリーン、初日2日間で動員23万7817人、興収3億1631万円という、2011年の松竹では最高のスタートとなった。約6分の1の公開規模かつ土日2日間の集計で、木〜日4日間の「タンタン」を動員で上回っている。パー・スクリーンも230万円と驚異的な数値を上げており、最終的に興収15億円超を目指す。

また、同じ3日(土)には、ご当地富山県での2週間先行から全国へと広がった「RAILWAYS 愛を伝えられない大人たちへ」(松竹)が登場。210スクリーンで動員12万2384人、興収1億3158万円と先行公開分を含むとは言え、前作の140%という順調なスタート。ターゲットがまったく異なる2作品の同日初日を迎えた松竹だが、今まで苦戦が続いていただけに、両作のヒットを機に複調を期待したい。

【注目作3本が興収10～15億円を目指すスタート】

そして2週目には、「仮面ライダーX仮面ライダー フォーゼ&オーズ MOVIE大戦 MEGA MAX」(東映)、「リアル・スティール」(ディズニー)、「源氏物語 千年の謎」(東宝)と3本の注目作が公開。「仮面ライダー〜」は301スクリーン、初日2日間で動員33万3133人、興収3億7842万円で、週末ランキングの1位に躍り出た。パー・スクリーンでも125.7万円と効率良く、シリーズ前作(最終興収13.8億円)比では興収102.2%となり、前作超えを狙う。

「リアル・スティール」(ディズニー)は、513スクリーン、初日3日間で動員22万121人、興収2億7765万円とまずまずのスタートだが、パー・スクリーンは54.1万円と公開規模を広げ過ぎの印象も。親子の感動の物語とロボット・ボクシングというSF色が混在する本作は、宣伝コンセ

プトをうまく伝えるのが難しそうだったが、ファミリー映画、デートムービーとして広く観客に届いたようだ。

「源氏物語 千年の謎」(東宝)は、414スクリーン、初日2日間で動員12万8825人、興収1億6376万円とやや寂しいスタートに。パー・スクリーンも39.5万円と吹替版のない邦画(1サイト1スクリーン)としては低めにとどまった。

公開規模に差はあるものの、いずれも10～15億円を目指す興行となった。

【「ミッション：インポッシブル～」が期待に違わぬ大ヒット】

今年最後の期待作「ミッション：インポッシブル／ゴースト・プロトコル」(パラマウント)が12月16日(金)に登場。636スクリーン、初日3日間で動員56万3251人、興収7億2583万円という好スタートで、パー・スクリーンも114.1万円と拡大公開の割に高い。シリーズ過去作の興収を見ると「ミッション・インポッシブル」(UIP／96年7月)が推定60億円、「M:I—2」(UIP／2000年7月)が97億円、「M:iⅢ」(UIP／06年7月)が51億5000万円となっている。本作も最終50億円を視野に入れるスタートとなった。

また、同週末には「フレンズ もののけ島のナキ」(東宝)も公開。334スクリーン、初日2日間で動員10万3886人、興収1億4223万円、パー・スクリーン42.6万円とまずまずのスタートをきった。知名度の高い童話「泣いた赤おに」を原作に、「ALWAYS 三丁目の夕日」シリーズの山崎貴とゲームなどのCGディレクションを手がける八木竜一が共同監督した3DCGアニメで、特異なキャラクターと映像がファミリーに素直に受け入れられるか否かがポイントだったが、見事に観客へと訴求したようだ。

【「イナズマイレブン～」が「～山本五十六」を上回る】

天皇誕生日の12月23日(金)からの連休に、今年最後の正月映画が登場した。「劇場版イナズマイレブンGO 究極の絆 グリフォン」(東宝)は274スクリーン、初日3日間で動員24万830人、興収2億9284万円で、10億超えが確実に視されるヒットを記録。パー・スクリーンでも106.9万円と効率が良い。一方、期待を集めた「聯合艦隊司令長官 山本五十六」(東映)は、308スクリーン、初日3日間で動員20万9284人、興収2億4964万円と「イナズマイレブン～」に届かず。こちらも10億円を超えてどこまで興収を伸ばせるかに注目。

「プリティ・ウーマン」のゲイリー・マーシャル監督が、「バレンタインデー」(2010／最終興収4.1億円)に続いて手掛けたオールスターキャストの恋愛群像劇「ニューイヤーズ・イブ」(WB)は、241スクリーン、初日3日間で動員11万4932人、興収1億6493万円。監督の前作で同傾向作でもある「バレンタインデー」を超えるのは確実だが、この手のジャンルの数年前の活況を考えれば、決して満足のできる結果ではないだろう。パー・スクリーンは68.4万円。

また、21日(水)の変則スタートで292スクリーンで公開した「ワイルド7」は、初日5日間で動員13万1921人、興収1億6943万円と最終10億円が難しい状況だ。「あしたのジョー」(東宝)など往年の名作コミックの映画化が続いているが、知名度が高い一方で原作ファンの思い入れが強い素材だけに、映像化に当たっては慎重に企画を固める必要があるだろう。

【2012年は、「～スパイダーマン」「～海猿」が最注目】

2012年は、洋画では「アメイジング・スパイダーマン」(SPE／6月30日)、邦画では「BRAVE HEARTS 海猿」(東宝＝フジ／7月)が最注目作となる。前者は、1作目(02)75億円→2作目(04)67億円→3作目(07)71.2億円と、3作とも70億円前後で安定している大ヒットシリーズ。今作ではキャストは一新するもののシリーズ初の3Dとなり、作品タイプの3Dでの動員効果も高そう。一方、後者は、1作目(06)71億円→2作目(10)80.4億円と興収を伸ばしてきたが、こちらは2作目が3Dで今作は2Dのみ。前作よりも平均単価が落ちてしまうため、動員の伸びにより前作並みの興収を目指せるかに期待がかかる。

こうした市場を牽引するビッグタイトルがしっかりと予想通りの興行をすることが、市場の閉塞感を払拭することにつながる。ほかにも注目作は数々あり、2011年のトレンドを打ち破るヒットの連打に期待したい。